

「美人画の雪月花 -四季とくらし 培広庵コレクションを中心に」展 作品解説

徳島県立近代美術館

■物語・歴史など

96 山川秀峰（やまかわ しゅうほう）「安倍野」

1928(昭和3)年 絹本着色 培広庵コレクション

浄瑠璃の「蘆屋道満大内鑑(あしやどうまんおおうちかがみ)」に取材した作品。安倍保名(あべの やすな)に助けられた和泉国信太(しのだ)の森の白狐は、保名の許嫁、葛の葉姫に化身し一子を設けます。それが、安倍晴明(あべの せいめい)だとする物語です。しかし、本当の葛の葉姫が表れたため、恋しい我が子と別れ、姿を消す。本作品はその場面なのでしょう。女性は、葛の葉の裾模様と化身を示す柏が表された着物姿。月夜の晩、秋の野原を従えた白狐とともに去って行きます。第9回帝国美術院美術展覧会(帝展)特選受賞作。(Y.M)

97 渡辺省亭(わたなべ せいてい)「塩冶判官(えんやほうがん)の妻」

明治初期 絹本着色 培広庵コレクション

足利尊氏の臣下として武功をあげた高師直(こうのもろなお)が、塩冶高貞(えんやたかさだ)の美しい妻の噂を聞き、その姿を一目見ようと湯殿の外からのぞき見するという『太平記』の中の物語がもとになっています。この主題といえば、省亭の師である菊池容齋(きくちようさい)の作品が有名であり、本作はそれを踏襲しているのでしょう。高貞の妻がまとう深紅の長襦袢が、彼女の白く美しい肌を強調しています。(H.M)

98 渡辺省亭(わたなべ せいてい)「塩冶高貞妻浴後図(えんやたかさだのつまよくごず)」

1892(明治25)年 絹本着色 培広庵コレクション

no.97 と同じく、湯浴み後の高貞(たかさだ)の妻の、着物を羽織っただけのしどけない姿が描かれます。高貞の妻自身は髪を梳き、侍女が髪に香を焚きしめて手入れに余念がありません。省亭(せいてい)は今では花鳥画の名手として知られていますが、時代考証に先鞭をつけた師の菊池容齋ゆずりの歴史画も多く描いたのです。(H.M)

99 梶原緋佐子(かじわら ひさこ)「桜下美人」

1921(大正10)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

乱れた帽子、帆掛船の模様の上衣、渦潮柄の鹿の子の長襦袢といえば、井原西鶴『好色五人女』の「姿姫路清十郎物語」を思い出すでしょう。ヒロインのお夏は、恋人だった清十郎を失った今では狂ってしま

い、二人が結ばれた思い出のある尾上の桜を夢とも現実ともつかず見つめることしかできません。その不確かな足取りが痛々しく描写されています。(H.M)

100 堀井香坡(ほりい こうは)「熊野(ゆや)」
1928(昭和3)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

謡曲「熊野(ゆや)」に取材した作品。時の権力者、平宗盛(たいらのむねもり)の愛妾、熊野のもとに、母が重い病だという知らせが届きます。帰郷を願い出たものの許されず、清水寺で開かれた花見に同行します。春雨となった宴で歌を詠み宗盛に差し出すと、宗盛が心を動かし、帰郷を許したという物語です。この絵では、熊野が短冊にしたための歌を見えています。花が散っているのは春雨のせいなのでしょう。(Y.M)

101 紺谷光俊(こんたに こうしゅん)「鶯宿梅 紅梅内侍(おうしゅくばい こうばいのないし)」
1930(昭和5)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

平安時代の歌人、紀貫之(きのつらゆき)の娘、紀内侍(きのないし)の著名な歌(勅なればいともかしこし..)を題材にした作品です。宮廷から梅の木を献上するよう命令があったとき、彼女は、春になり帰ってきた鶯が「私の家はどこも尋ねられたら、どう答えたらいいのでしょうか」と詠みます。物語の内容はいろいろな文献によって少しずつ異なりますが、枝に歌が結ばれたようすが描かれていますので、歴史物語『大鏡』を参考にしたようです。(Y.M)

102 堀井香坡(ほりい こうは)「朝(加賀の千代女)」
昭和10年代 絹本着色 培広庵コレクション

加賀の千代女は、江戸時代中期に、現在の石川県で活躍した俳人です。これは、彼女のよく知られた句、「朝顔や つるべとられて もらひ水」から題材をとっています。朝起きて井戸の水を汲もうとすると、朝顔の蔓が釣瓶(つるべ)にまきつき、とてもきれいに咲いているので、近所からもらい水をしたと詠んでいます。この絵は、秋草文様の着物を着た女性が、朝顔の花を見ている場面。(Y.M)

103 山川秀峰(やまかわ しゅうほう)「鵲乃(かささぎの)鏡」
1920(大正9)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

「鵲乃(かささぎの)鏡」の物語は、中国の『神異経(しんいきょう)』(前漢時代)に記されています。離れて暮らすことになった夫婦が、鏡を割ってそれぞれが半分を持ち、再会のときの証としました。しかし、妻が寂しさのあまり他人と密通したところ、鏡が鵲となって夫の元に知らせに行く。そんなお話です。この絵は舞台を近世初期に置き換えたもので、鵲が勢いよく飛んでいくようすを、女性の後悔の気持ちとともに表しています。鏡は消えかかろうとしています。(Y.M)

104 渡辺省亭（わたなべ せいてい）「嗟峨野(仏御前の図)」

明治後期 絹本着色 培広庵コレクション

『平家物語』に登場する白拍子(しらびょうし)の仏御前(ほとけごぜん)は、平清盛の深い寵愛を受けます。しかし仏御前は自分の前には祇王(ぎおう)と祇女(ぎじょ)という二人の白拍子が寵愛を受けていたことを知っており、やがては自分もその二人同様、見限られる運命にあることに気付いていました。これは世の無常を感じた仏御前が、祇王と祇女を訪ねて密かに嗟峨野へ向かう場面を描いたものです。(H.M)

105 三木翠山（みき すいざん）「維新の花」

1940(昭和15)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

明治維新で活躍した木戸孝允(たかよし)(桂小五郎)の妻で、幾松(いくまつ)と呼ばれた芸妓(げいぎ)時代の松子を表した作品です。京都で討幕運動を行っていた小五郎が幕府に追われ、鴨川の二条大橋の下に潜んでいたとき、松子は、握り飯を運んだといわれています。この絵では、幾松が何気ないそぶりで、荷物を橋の下に落としているところが描かれています。(Y.M)

解説 森 芳功(Y.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>

宮崎 晴子(H.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>